

【海外留学レポート】

## カナダでの学び

### －修士課程を通しての気づき－

#### Endeavouring to Achieve Goals: Believing in Yourself and Good Self-Care

筑波大学人文社会科学研究科 米沼 詩音

YONENUMA Shion

(Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba)

キーワード：カナダ、政治学

#### はじめに

カナダの大学院を修了して1年が過ぎた。修士課程では、毎日の授業をこなし、同時に論文を書くという非常に密度の濃い期間だった。カナダ人と肩を並べて学問に取り組む中で、多くの困難や心労が伴った。しかし幸いにも落ち込んでばかりの留学生活ではなかった。日々課題に追われ、前に進むのみの状況だったため、目の前の研究をどうやってこなすかで頭がいっぱいだったからである。そして多くの方々から頂いた支えがあったからである。

1年間を通して言葉では言い尽くせないほど多くの学びを得た。学術的な知識はもちろんだが、研究に対する姿勢や人生観など、カナダでの体験は今の私を形作ってくれた。そして留学中に自分の成長に集中することが出来たのも、私を支えてくださった様々な方のおかげである。そして日本学生支援機構から手厚い奨学金を頂いた。心からの感謝を申し上げたい。

#### 留学を決めた理由～出願まで

海外の大学院で学びたい、海外で自分の可能性を試したいと長らく思っていた。高校2年生の時にカナダで1年間の交換留学を経て、英語はある程度話せるようになっていた。次に挑戦するなら、交換留学以上のことに挑戦したいと考えていた。同時に、日本の大学で比較政治学とカナダ政治を専攻し、学問に対する興味・関心はどんどん膨らんでいた。

実は高校の時の留学はあまり良い思い出ではなかった。というのも、カナダのとある地域に派遣さ

れた私の周りには、アジア人に対して好意的な思いを抱く人がほとんど居なかった。誰も知らない場所へ行くことは大きな挑戦だったし、17歳の私にとって自分を無条件に理解してくれる存在が近く居た日本が、いかに恵まれていたのかを思い知った。ただ、その後進学した日本の大学で、ある素晴らしい先生が受け持つ「カナダ政治」という授業を受け、私が体験した留学生活は「モザイク国家」と言われる多様性に富んだカナダのピースの一部だったのだと認識した。つまり、モザイクのピース同士が混じり合わないからこそカナダ特有の多文化主義が保たれる。お互いの文化・民族・宗教などを尊重しあいながら保つことが、カナダが多文化主義を維持できる所以なのだと知り、カナダの政治を学ぶことに強く惹かれた。最初のカナダ留学から実に6年が経過していた。

カナダ政治はいくつもの特徴があるが、特に連邦制に興味を持った。日本のような単一制国家は中央が全ての決定を司り、その決定を地方へ行き渡らせるが、連邦制は異なる。中央政府と地方政府の立法権の分割が憲法に明記されているというのが連邦制である。連邦政府と州政府が、医療や教育などについて対等に話し合いながら諸問題を解決する協議がカナダの政治に見られる。これをカナダでは連邦・州政府間外交と呼ぶ。外交とは一般的に異なる国同士が交渉し協力し合う関係のことを指すが、カナダの場合は内政レベルでその協議が行われているのである。

その分野を極めたいと考えた私は、カナダの大学院の中でもそれに特化した大学院で学びたい、と思った。もちろん当時大学4年生だった私には迷いがあった。大学院に行って意味があるのか、政治学や連邦制を学んだところで何になるのか、資金はどうするのか、など数えればきりが無い。卒業論文との兼ね合いをつけながら、大学卒業直前まで出願や奨学金申請に取り組んだ。

### カナダの大学院留学が始まって

2016年9月から、オンタリオ州クイーンズ大学大学院・政治学科で授業が始まった。大学院レベルでは、3学期のうち2学期は週3つの科目（各全12回）を受けるのが必須で、残りの学期で論文を仕上げるというカリキュラムであった。1学期は、カナダ政治、アメリカ外交史、移民政策の3つの科目を受け、毎回の授業が刺激的で面白かった。おそらく他の欧米諸国でも同様だが、カナダの授業はリーディングが山のようにあり、それを読んだ前提で授業が進む。主な授業内容はディスカッションである。授業は主に以下の3つのポイントに沿って進められる。1. 新しい知識を吸収する、2. 自分の意見を皆に伝える、3. ディスカッションを基に自分の考えを見直す、である。先に授業が刺激的で面白かったと申し上げたが、そう思ったのは最初の3回くらいで、残りは苦しみに溢れていた。そして周りに留学生がおらず同級生は皆カナダ人だったため、何となく居心地の悪さを感じていた。

日本で生まれ育った私は最初のポイントである知識を吸収することに精一杯で、自らの意見をまとめて皆に伝える、そしてディスカッションに加わるなど、言葉では言い表せない困難があった。そして勉強が好きだけではやっていけない世界だと痛感した。このように留学中は自分の創造力と能力の

なさを何度も嘆く日々が続いた。それでも自分の弱点を克服すれば、みんなと肩を並べて議論に加わることができる。と自分に言い聞かせ、日々のリーディングや予習、課題に取り組んだ。留学中の生活は朝6時に起床し、8時まで課題や研究に取り組み、9時頃に学校へ行き授業を受けた。お昼過ぎから夕方まで課題の続きし、途中夕食を挟み、その後0時まで図書館にこもり研究した。帰宅後の2時間は課題と研究の続きに取り組み、深夜2~3時に寝る生活を繰り返した。

## 留学中の困難

1年間を通しての困難は様々あったが、最も苦労したのは学問の手法の違いである。その一つに、アカデミックな環境で自分の存在を示すことが挙げられる。この場合の存在とは、自分の意見であり、なぜその意見を持っているのかという学問の中での立場である。授業内のディスカッションはもちろん、課題レポートや試験、学会など、いつ何時も自分の意見を示し、360度どんな方向から質問・指摘が来ても答えられるように知識と方法論の装備を欠かさない。自分の存在を示すことが出来ないというのは、自分が物理的にその場にいても、まったく存在していないことと同じである。日本で教育を受けた私にとって、言語や価値観の違いが壁となり想像以上に苦労した。まず、分からないことを徹底的に調べ自分の理解を深めた。課題リーディングは各クラスから週3~4冊程度の文献があったが、それに付随した予備知識を得るためにその3倍程度は読むようになった。しかし、いくら膨大な量の文献を読んだとしても、思ったほど理解度は高まらない。だからさらに他に読み、友人に質問し、自分の抜けている知識を補った。それでも知識の波に飲み込まれたまま立ち尽くす時もたびたびあった。

また、大学院生活では、他の同僚との価値観の違いが次元を超えるほどであると常々感じた。もちろん育った環境やバックグラウンドが違うため当然のことだが、ディスカッションやプレゼンテーションなど様々な場で価値観の違いを目の当たりにした。例えば移民政策の議論の場になると、昨今の北アメリカやヨーロッパの状況を鑑みて「カナダはこれからも移民や多様性に対して寛容であるべきだ」という意見が多かった。そして欧米諸国の手本となるようカナダは多文化主義というスタンスを保つ方が賢明だ、という考えが主流だった。私個人はこれらの主張は評価に値し、他国のリーダーとなれるよう移民政策に取り組む姿勢はカナダらしいと考えていた。ただ、日本のような移民に寛容とは言えない国に対しては手本を示せるのだろうか。そして、そもそも先進国だから移民を受け入れる（受け入れない国は先進国とは言い切れない）という主義主張がありきで移民政策の議論が進められている印象を感じた。私が日本で育ったからこそ、この疑問が生まれたのかもしれない。これをカナダで生まれ育った同僚に伝えなければならない。理解してもらうには、価値観を越えたロジックによる説明が不可欠である。そして分かりやすいようにカナダでの事例を引き合いに出したり、まかり通っている常識を否定せずに自分のポイントを述べたりするなど工夫を重ねた。修了までに他の同僚のような議論スタイルを完璧に身に付けたとは自信を持って言えないが、これからも価値観の違いを超えた

議論の展開を出来るような考え方の訓練を続けたいと考えている。

もう一つの苦勞は、先ほどの価値観の違いにも通じる部分があるが、政治学の中で欧米の研究が優勢と感じた点である。つまり、自分のこれまでの知識や考えを展開する場すらない。もちろん、これまでの欧米の研究の貢献が政治学にもたらしたものは非常に大きい。しかし、日本特有の問題（高齢化社会、外国人労働者の受け入れなど）が議論に出てくることはほとんどなく、そもそも日本やアジアへの理解度が低い印象を受けた。日本やアジアが政治学の研究対象になるよりも、地域研究の題材として選ばれることが多かった。色々な原因が推測されるが、日本やアジアへの社会科学での学術的な需要が少なく、様々な地域をフェアに横断的な見方をすることがこれまで求められてこなかったのではないかと考えた。政治学で日本を見るにはアメリカを通して見るのがほとんどで、「日本はアメリカが民主化に成功した例の一つである」という決まり文句がたびたび繰り返された。その言葉を聞いているうちに、何をもって民主化と言えるのか、民主化の後はその国の民主主義を誰が育てるのか、などの疑問が湧いてきた。比較政治学の中では、比較できない事例というのは存在しないと考えられている。もし比較できないというのなら、共通のモノサシである分析枠組が破綻していることを意味する。それならば、なぜ日本と他の国を比較する研究への認識が低いのか、なぜ日本で当たり前の問題を政治学に落とし込んで他の国の事例を比較し、分析結果が社会をより良くする材料として使われないのだろうか。日本・アジアの文化的側面が世界中の関心を集めていることは実感するが、政治学においてどのように関心を集められるだろうか。これらの疑問を考えた時、私は将来欧米と日本・アジアの学問のギャップを埋めることに貢献したいと考えるようになった。

## 留学中の支え：人

上記に述べたように留学中の困難は様々あったが、四六時中苦勞を感じながら生活をしていただけではない。幸運にも私には現地でも支えてくれる人々がいた。同じ政治学科に在籍する友人らは私を日本人とか留学生として扱うのではなく「私」として接してくれた。遅くまで一緒に予習をし、お互いのペーパーを見せ講評し合い、時には自分たちのオフィスでパーティーを開いた。公私ともに充実した日々を送ることが出来たのも彼らの存在があったからだ。彼らの生きる姿勢から学んだことは数え切れない。いつも真剣に学問と向き合う姿も、休憩がてらにパブにビールを飲みに行くのも、仕事と遊びのバランスを取ることの重要性を知るきっかけになった。私は物事を詰め込み過ぎてパルクしてしまう傾向があるので、友人はよく“*Treat yourself*（自分にご褒美あげなよ）.”と言い、外に連れ出してくれた。勉強の合間にハイキングしたり、ワインを飲んだりした時間は思い出深い。

また、私はカナダ人の大学院生4人と暮らしていたが、そのうちの2人と特に仲よくなった。私たち3人は食べるのが大好きで、街中のレストランを試しに行き、暇が出来ては料理番組を見ていたが、特に3人で料理する時間が一番楽しかった。あれこれ言いながらスーパーで買い物し、帰って来

ではそれぞれが役割について料理した。私自身料理が好きで、よく日本料理を振る舞った。ここ数年で日本食への関心が高まっているからか、豆腐や海藻などの食材や、醤油や味噌などの調味料の使い方に興味を持っていた。手のひらの上で豆腐を切ると「シオンはニンジャだ！」と喜んだ。時には家にある食材でご馳走を作ろうと、粉からピザとラザニアを作り、思いの外上々の出来栄で満足した。料理をする時以外は大学院生らしく居間で夜が明けるまで勉強し、お互いを励まし合いながら課題に取り組んだ。帰宅しても自分を温かく迎えてくれる彼女らに終始支えられた。

そしてカナダで私を見守ってくれる存在として欠かせないのが、ナイアガラに住むある家族である。高校留学の時に知り合って以来10年以上ずっと交流を続けている。その家族は東京ドーム何個分かの敷地で採卵用の鶏を育てる事業を営んでいる。一からその事業を始めたと言うが、当初は上手く行くかも見当がつかず不安だったと言う。しかし「人生にはリスクを負わなければいけない時がある、一旦決めたなら目標に向かって頑張るしかない」と教えてくれた。私はその言葉を聞いた時、自分の状況に当てはめて考え、大学院留学中も目標を見据えて行動あるのみだと励まされた気がした。感謝祭やイースターなどで休暇がある時にたびたびお宅にお邪魔し、家族の一員として迎えてくれた。彼らが居たからこそ、私は留学中に孤独に押しつぶされずに済み、学業に一層身が入った。

## これから

カナダでの1年間の修士課程を終え、現在私は日本でもう1つの修士号を取るべく、研究に取り組んでいる。帰国当初はカナダでの研究で感じた劣等感がつきまとっていたが、時間を経て自分の気持ちに整理をつけることが出来た。そしてこの修士課程を終えたら、カナダの博士課程に進学したいと考えるようになった。カナダでは苦しい日々を送っていたはずなのだが、その中でも一生懸命勉強し考える中で発見を得た感覚ほど勝るものはないと感じている。これから先は、政治学における日本・アジアと欧米の研究のギャップを埋め、知を通して社会に貢献したいと強く考えている。

確かに進学すればこれまで経験した以上の苦勞を伴うことは想像に容易い。しかしながら、現状の困難や先の苦勞を予想するばかりでは前に進むことができない、と留学準備期間から感じている。本来私たちは誰しも何かを成し遂げたいという意志があると思う。ただそれを実現するためには、その意志を固く持ち続け、幾度もの壁を乗り越えなければならない、と留学を通して学んだ。そして心が折れる場面に何度も遭遇するかもしれないし、その絶妙なタイミングで諦めたいという気持ちが自分の心を支配することもままある。ところがその諦めそうな気持ちを押しつけて目標に向かうことの大切さは、留学や学問だけでなく、人生でも同じことが言えると学んだ。

同じように留学や海外生活を志す方々、あるいは新しい挑戦を考えている方々には、ぜひ最初の意志を大切に目標を実現してほしいと切に願う。目標に向かって突っ走る中で、自分のやっていることは意味があるのだろうか、正しいのだろうかと不安になることも多いだろう。そんな時には休息

を取り、次にまた歩けるようにエネルギーを蓄えるのも賢明である。休みを挟みながらも歩みをやめないという姿勢を大切に、目標に向かって突き進んでほしい。そして目標を叶えた時には、取り組み始めた頃とは比べられないほどの大きな自信と希望を持っているはずだ。やがて次への活力もみなぎり、また新たな目標に向かって突き進むことができるのだと思う。だからこそ、初めの一步を踏み出す原動力となる意志と勇気が重要なのではないだろうか。



写真 1 ブルージェイズの観戦（筆者右）



写真 2 Harry Potter Library  
と呼んでいた学校の図書館

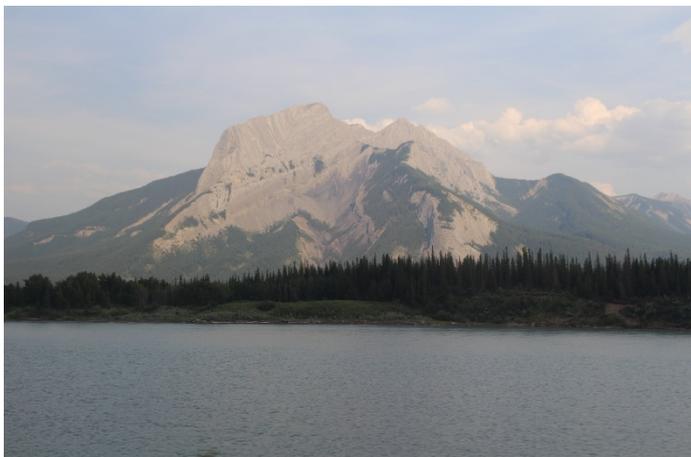


写真 3 ロッキー山脈を電車の中から